



## 海外から 研修員に聞く



着物を着せてもらったオリヴァさん(2006年7月14日)

**ファニア・オリヴァ・  
ラファリマナナ**さん  
(マダガスカル共和国)  
Ms. Fanja Oliva Rafalimanana  
マダガスカル農業牧畜水産省  
農業技術管理局  
プロジェクト担当官

### JICA帯広「畑地帯における農業基盤整備コース」 (2006年5月28日～8月19日)で研修。

#### 4つの島が載っていただけの日本

「初めまして。よろしくお願ひします」と日本語で大きな声で明るく挨拶をしてくれた。元気いっぱいな人という印象をもった。

「JICAから帯広と聞いて地図を開いてみたら載っていたのは4つの島だけで別の地図で帯広を探しました」。首都のアンタナナリボからパリへ飛んだ。午前中に着いたが一度空港を出て夜の便で日本へ向い、帯広まで38時間の旅であった。「脚が浮腫んでゾウみたいになりました」

こうしてはるばるやって来た帯広では人々が人なつこいのが嬉しかった。「自転車を外出したり、スーパーマーケットに出かけると、英語を話してみたいのではありませんか、よく高校生に話しかけられます」。「マダガスカル語はマダガスカル語(マラガシ)でフランス語は第1外国語として学校で習いますが、父がこれからは英語が必要になるからと英会話教室で勉強させてくれました。ですから日本の高校生の気持ちはよくわかりますよ」といつも会話に応じてくれているらしい。優しいお母さんのイメージだと思っていたら、やはり6才と3才の娘がいた。「この研修中一番辛いのは小さい娘たちと離れていることです。週末などセンターのレストランに食事に来ている家族連れの小さい子たちが楽しげにはしゃいでいるのを見ると娘たちを思い出して会いたくなります」。

#### 耕地の40%は米作地帯

ところで、マダガスカルの主産業は農業である。さらに全耕地面積の4割は米作と聞いて少し驚いた。米には主食のひとつで、その生産には力を入れている。米作には灌漑が不可欠だがまだまだ補修、維持

管理を必要としている。各地に小規模な灌漑システムを張り巡らしている。これらを定期的に巡回するのもオリヴァさんの職場の仕事である。現在マダガスカルの米の収量は1畝当たり2,3トンとか(因みに日本の平均収量は6トンと教えてくれた)。「広い国土に灌漑設備を行き渡らせるのは大変な仕事ですが、国民の75%はわずかの畑を耕す農民です。まず自給できるところまで収量を増やして、いずれば販売できるくらいまで伸ばしたい」と今回の研修では灌漑について一生懸命に学んでいる。



#### 「-manana」の意味は「何かあるいは豊かなもの」

現大統領の名前はラヴァロマナナ(Ravalomanana)といいオリヴァさんと同じく語尾をマナナと綴る。-manana とは「I have something or to be rich」。

前夜何か悪夢を見たというのであるお寺のお守りを差し上げた。インタビューが重荷だったのかと申し訳なく思ったが、それでも帯広に来て2カ月、体重が3kg増えた。食事は美味しく何も問題はないとこり。

マダガスカルでは全てが対照的だ。地形は冷涼な高地と年平均気温が25度以上の暑い海岸部。ほとんど雨の無い南端部と年間3000mmも降るインド洋に面した山麓地帯。町に暮らすお金持ちと田舎に住む貧しい農民たち…。

しかし、世界で四番目に大きい島は「マダガスカルの大自然」として有名で珍しい動植物がたくさん見られる。「アフリカだけどライオンやゾウは居ないの。でも綺麗な小型のキツネザル(レムール)や有名なバオバブの木の上から景色を見ることが出来ますよ」とオリヴァさんは故国の宣伝を忘れなかった。

2005年から独自の通貨アリアリが通用。1アリアリ=2,100米ドル



マダガスカル島に数種生息するキツネザル(レムール)のうち、尻尾の模様が特徴的なワオキツネザル(和名)



バオバブの樹上の小屋から景色を見ることができる

## NRCニュース

### 北方圏センター夜9時まで開放、170人が来場(7月21日)

「カルチャーナイト2006」に参加

ふだん見られないものが見られる、ふだん聞けないものが聞ける、ふだん行けないところに行ける…北海道の短い夏の夜を…と、今年も7月21日(金)に市内71施設81団体(カルチャーナイト実行委発表)が夜間開放し、音楽・映像あり、展示・見学あり、そして体験ありと各所それぞれが趣向を凝らして開館。夜遅くまで回って歩く市民の姿が見られた。

北方圏センターでは、「世界の文化に触れてみよう」をテーマに午後5時半から「北方圏センターカルチャーナイト」をスタート。民族楽器の馬頭琴演奏と、のど歌(ホーミー)の嵯峨治彦さんと歌と語りの田中孝子さんのアンサンブルユニット「野花南(のかなん)」によるコンサートのほか、JICA札幌国際センターに滞在している世界各国からの研修員の参加を得て、各国の遊びを体験したり、世界の文字で名前を書くプログラムなどを実施した。

来訪した人たちは、馬頭琴とどの歌の美しい調べに聞き入ったり、ブラジルの歌に合わせて踊る「エスクラーボデジョ」やアルゼンチンの伝言ゲーム「テレフォノ・デス・コンプエスト」などの遊びを楽しんだり、日頃あまり目にする事のないヒンドゥー語の文字やキリル文字で書かれた自分の名前を見て驚いたり、思い思いに日照時間の長い北国(北方圏)の夜を楽しんでいた。



「世界の遊びを体験しよう」歌って、踊って、輪になって。ブラジルやアルゼンチンの遊びを一緒に



「世界の文字で名前を知ろう」研修員や留学生の国の文字で自分の名前の書き方を教えてもらう子供たち

### (社)北方圏センター内に「南米圏交流室」を設置(7月1日)

昭和36年の設立以来、南米に移住した北海道出身者や日系人への支援やその子弟の留学生受入など南米各国との事業を推進、交流を深めてきた(財)北海道海外協会は平成18年7月1日付で北方圏センターと統合し、国際協力部「南米圏交流室」として再スタートした。今年度はパラグアイから1名の留学生を受け入れている。さらに、北海道外国訪問団受入事業として、北海道出身者を父祖に持つ日系青年を対象に、ブラジル、パラグアイから各8名の受入れを予定している。(国際協力部南米圏交流室)

### 北海道海外研修員等受入事業、始まる

北海道からの補助金を受けて実施している研修員の受入事業は、本年度、南米のブラジル、パラグアイ、アルゼンチンからの海外技術研修員4名と中国・黒竜江省からの自治体協力交流研修員1名、ロシア・サハリン州からの通訳養成研修生1名を受け入れて始まった。

研修員は、6月から7月にかけて相次いで北海道入りし、日本での生活などについてのプリーフィングや日本語研修を受け、7月から情報通信や水産加工、日本料理などそれぞれの研修テーマに沿った研修実施機関で研修を行っている。北海道を初めて訪れた研修員もあり、研修の合間を縫っての道内観光や初めて体験する北海道の冬を楽しみにしながら、来年の3月まで(自治体協力交流研修員は11月まで)研修が続く。(国際協力部)